

みんなで建てよう「ビハーラ」

# がん患者・家族語らいの会

## 通信 [No. 209]

2019年 8月 3日発行



## がんを「引き受ける」という選択 一人称のグッド・デス（よき死）を考える

原山建郎

健康ジャーナリスト、日本東方医学学会学術委員、  
武藏野大学仏教文化研究所客員研究員

### がんを「受容」する、がんを「引き受ける」。

かつて主婦の友社に在籍中、1980（昭和55）年から足かけ12年間、前半は『わたしの健康』の編集記者、後半は編集長をつとめました。2002（平成14）年に同社を辞めて、フリー編集者になりました。それ以来、「健康ジャーナリスト」として、医学・医療分野でのインタビュー取材・執筆・講演活動は、平成から令和に替わった今年で、いよいよ40年目に入りました。

実は、2015年10月10日、本日と同じ築地本願寺の講堂でしたが、私は『遠藤周作の病いと神さま——「心あたたかな医療」の源流をさぐる』という講話の中で、このように述べております。

日本では、病気になること、病いに罹（かか）ることを、「病いを得（え）て」といいます。

六十歳代前半までの私は、毎年の健康診断ではオールA、どこも悪いところはありませんでした。

ところが、数年前、左膝の痛み、両手親指の腫れと痛みが始まりました。一時は歩行困難な状態となり、階段は手すりにすがって昇り降りしていました。この二月、リウマチ膠原病の専門医に受診して、関節リウマチと診断されました。現在は二種類の西洋薬のお陰で、何とか小康状態を保っています。かつて健康雑誌の記事に、「関節リウマチは、起床時の拘縮が……」などと書いていた私でしたが、いまにして思えばそれは文字どおり「他人事（ひとごと）」の原稿でした。

いま、このときの草稿を読み返しながら、あのときの私はよくいえば客観的に、その実、三人称の視点で「遠藤周作の病いと神さま」の「病い」を、そして「神さま」について、「他人事（ひとごと）」のように話していたのではないか、そう思います。本日、ここでお話しする一人称の、当たり前ですが、他人事（ひとごと）

ではない、自分自身の生死を突き付けられた、私の体験「がんを引き受けるということ」について話す機会を与えられたことを、心から感謝しております。

「がん患者」を、英語ではa cancer patientといいます。がんがcancer、患者はpatientです。このpatientの語源は、ラテン語の「苦しみに耐える、我慢する」からきています。

しかし、ある日、突然やってきた私の「がん」細胞もまた、私のからだを構成する60兆個の細胞の一部ですから、a cancer patient（がん患者）ではなく、a person with cancer（がんとともにいる人）、あるいはa person live with cancer（がんとともに生きる人）でありたいと思います。

さて、今回のご依頼をいただいたとき、膀胱がんで入院・手術・治療したことの簡単な顛末をメールでお知らせしたところ、その返信メールに「一人称の死に対峙し、膀胱がんそのものを受容した」体験を伺いたいというメッセージがありました。私は再び、返信メールにこう書きました。

【一人称の死に対峙し「膀胱がんそのものを受容した】のではなく、「膀胱がんそのものを引き受ける」と覚悟したということです。「受容」は悟りの感覚ですが、「引き受けると覚悟する」とは、ひとまず、膀胱がんから逃れられない現実を認める、仏教でいう「苦（思い通りにならないこと）」もある、思いどおりにならないと諦める（明らかにする・認める）ことにしたのです。と。

もちろん、「がんそのものを受容する」という生き方もあると思います。しかし、術後の痛み、排尿時の困難、高熱のつらさは、未熟者の私にとって、とても受容できるものではありませんでした。どうやっても「思いどおりにならない」この現実を、「引き受けると覚悟する」のが精いっぱいだったのです。その気持ちは、小康状態をキープできている、いまでも変わることはありません。

本日は、「がん」によって与えられた、多くの貴重な「気づき」について、そして最後に、自分が罪悪深重煩惱熾盛の凡夫、実に情けない人間であったという心からの懺悔、そして、その迷い多き一人称の、この私

がめざす「グッド・デス（よき死）」について、お話ししたいと思います。

### 南木圭士さんのエッセイ、『天狗岳へ』を読む

まず、私の「膀胱がん」についてお話しします  
4年前から、関節リウマチの治療で通院していた大学病院で、リウマチ科の医師から「ここ何回かの検査で、尿潜血が見られるので、泌尿器科に受診するように」と指示があり、泌尿器科で受けた尿の細胞診検査で、5段階中の3（グレー）であると指摘されました。引き続き行われた膀胱内視鏡検査でも気になる箇所があることがわかり、昨年8月初旬、東京労災病院に8日間、検査入院をして、膀胱内視鏡によるバイオプシー（生体細胞検査）を受けました。

その結果、膀胱粘膜に拡がった上皮内がんであることが判明したので、1カ月後の9月初旬、やはり8日間入院して、膀胱上皮内がんの切除術を受けることになりました。

がんが粘膜下まで浸潤している場合には、膀胱の全摘出もあり得ると聞いて、正直なところ、かなりビビッていました。なにしろ、私の本職は健康ジャーナリストですから、あちこちから膀胱がんの最新情報を取り寄せましたが、調べれば調べるほど、不安はつのるばかりです。

そんな心境でいたある日、8月19日の日経新聞朝刊、最終面の文化欄に載っていた、医師で直木賞作家の南木圭士さんのエッセイ、『天狗岳へ』に目がとまりました。1951年生まれの医師、南木さんが、奥さまと二人で長野県茅野市の天狗岳、標高2600メートルの山に登ったという話でした。

### 『天狗岳へ』 南木圭士（作家、医師）

初泊まりのホテルで朝食をしっかりと摂り、出かけた。白駒池駐車場を八時四十分に出発。これまでの天狗岳登山では遅くとも七時には登り始めていたので、かなり遅い。（中略）

帰路、湿った石の重なる樹林の長い下りで妻が遅れ始めた。つま先が上がりにくいという。下肢の前脛骨筋が衰えてきているのだ。（中略）

登山道は木々の葉におおわれ、あたりが急に暗くなってくる。出発も下山開始も、遅すぎたのだ。反省はするが、若いころのようにはいらだたない。妻

を無事に駐車場に連れ帰ることだけを目的と定める。真の決断とは、あれこれ状況判断するのではなく、状況そのものを引き受けること。心身ともにつらい時期（※これは、小説『ダイヤモンドダスト』で第100回芥川賞を受賞した翌年、南木さんはパニック症を発症し、その後長い間うつ病に苦しめられたときのこと）、本に傍線を引いた先哲の教えが夕刻の針葉樹林のなかでよみがえる。

下りの斜度が減ってきた。もうすぐだよ、と頼りない足取りの妻にかけた声は林床（森林の地表面）の深緑の厚い苔に吸い取られてしまう。頭上のひらけた鞍部に出て仰ぎ見れば、午後五時近い夏の陽はまだ高い位置にあり、ほっとする。淡々と状況を引き受けていたら、そちらのほうが変わってくれたのだ。（中略）

諦めるの語源は事態を明らかに見て取ること。言葉を介すると心身が鎮まる。

南木さんのエッセイの中に、ハッとさせられる「気づき」が、いくつもありました。

★真の決断とは、あれこれ状況判断するのではなく、状況そのものを引き受けること。

★淡々と状況を引き受けていたら、そちらのほうが変わってくれたのだ。

★諦（あきら）めるの語源は事態を明らかに見て取ること。言葉を介すると心身が鎮まる。

そこで、私は考えました。そうか、いまの私にとって「真の決断」とは、あれこれ状況判断するのではなく、いま、がんである私、という状況そのものを引き受けることではないだろうか。そして、「淡々と状況を引き受けていたら、そちらのほうが変わってくれたのだ」という言葉の意味は、いまの状況（私が、がんであること）に変わってほしいと願うのではなく、この「状況を引き受ける」と覚悟する、つまり、a person with cancer（がんとともにいる人）として、「がんから逃れられない現実もある、私の思いどおりにならないことがある、と認める」ことなのかも知れない、と。

そして、もうひとつ。このエッセイは、天狗岳に登る、往路の話ではなく、頂上から下山する、帰路に遭遇した困難について書かれていました。5年前、私の関節リウマチの症状がひどかった、0.2が基準値であ

るCRP（炎症反応）が9.43もあったころ、駅の上り階段は手すりにつかまって、何とか登れましたが、下り階段はひと足ひと足、そつと降りないと激痛が走りました。何で駅には上りのエスカレーターがあるのに、下りのエスカレーターがないのか、と恨んだものです。私の人生も、若いころの上り坂より、齡を重ねたいまでは下り坂のほうが難しい、と実感いたしました。

### 「悠々と猫に喰われていくことが『救い』なのか

さて、9月初旬、執刀医から「見えるところのがんは取りました」と言われ、上皮内がんの手術は終わりました。しかし、手術から2日間は、カテーテルでの排尿、その後は昼夜を問わず数時間おきの頻尿、排尿痛に悩まされました。発熱時はアイスパックにも度々お世話になりました。

術後数日たって、少し体調が落ち着いたのでベッドの上でスマホを開くと、大分県宇佐市・佐藤第二病院院長で龍谷大学大学院教授・田畠正久先生からメール添付で、「9月のご案内」が届いていました。配信の日付を見ると9月4日（火）、ちょうど私が膀胱がんの手術を受けていた日でした。

タイトルは『「浄土真宗の救い」について——ある僧侶の述懐』でした。どんどん読んでいくうちに、これは「私（原山建郎）のがん」について書かれたものである、という確信に変わりました。

少し長い引用になりますが、南木圭士さんの『天狗岳へ』と同じような「気づき」をいただいたので、その一部をご紹介します。田畠正久先生の講話を聴聞された僧侶が書かれたものです。

聞法会に田畠正久先生を講師にお迎えしてお話を聞く機会があった。その折に配布された資料の中に「浄土真宗の救い」について、田畠先生の恩師の細川先生（福岡教育大学教授・細川巖さん）の話された「ネズミ教」という象徴的なたとえ話が紹介されていた。

この「ネズミ教」の譬えとは、およそ次のようなものである。

ネズミ教を信仰するあるネズミの一家がいて、ネズミ教の教会で教主の教えを聞いて、深く感動して、教えを護り、祈りをささげ、開催される行事にも熱心に参加して、そのお陰で一家は経済的にも恵まれ、

また息子の受験も希望校にも入れ、いわゆる人並みな幸福な生活を営んでいた。

ところが、その幸福が吹っ飛ぶような大事件が起きた。それは一家の大黒柱である父親が猫に遭遇したのである。父親は「神さま、どうか猫に捕まり喰われないようにと必死に祈った」が、しかし猫に捕まり、とうとう喰われる。その時、ネズミの父親は「あれだけ神様にお願いしたのに。神も仏もあるものか」と叫びながら、猫に喰われてしまった。

この父親の断末魔の叫びを、逃げ延びた息子のネズミが聞いていた。

後日、息子のネズミはネズミ教の教主に教会であった。私の父親は「神も仏もあるものか、と言しながら猫に喰われて死んだ」が、神様は救っては下さらなかつたと文句を言ったという。そのとき、ネズミ教の教主は「あれは信心が足りなかつたのだ」と。信心があれば猫に合うはずがない、という言い訳のような返答をした。

このような譬え話を細川先生はされ、それでは淨土真宗のご法義における救いとは、どういうことかというと「悠々と猫に喰われていく」ことが「救い」なのだとということである。この象徴的な譬えで、私たちはネズミの父親の救いとは何かを考えるとき、少なくとも「猫に悠々と喰われていく」ことが救いだとは考えないだろう。猫に喰われるという危険に遭遇しないことや、猫に遭遇しても信仰による摩訶不思議な力が湧いてきて猫を追い払う、あるいは猫を追い払う誰かが現場に現れる。それが「救い」だと考えるのではないだろうか。

この例え話で、「猫」とは抗いようのない出来事、たとえば自然災害や交通事故や、思いがけない災難、あるいは末期癌の宣告などであろう。このような現前の事実を突き付けられたとき、日頃積み上げてきた幸せは跡形もなく消え失せるだろう。田畠先生は、人間の苦悩というのは、人間の持つ希望（理想）と現実のギャップが大きければ大きいほど、思い通りにならないという苦悩が大きいのではないか。その意味で、自身の健康と長生き、そして愛する家族の幸せこそ我々の理想とするものであり、ここに「猫」に象徴されるような災難が訪れたとき、その埋められないギャップに苦悩

し、右往左往するのが私たちの実像なのでしょう。

その意味で、自己中心的な想念によって描き出す理想を現実、つまり自己中心的な想念においては理不尽としか言いようのない現実を、ありのままに受け入れることによってギャップを埋めていくことで苦悩を小さくできるだろう。つまり、「在りのままの現実を受け入れて、念佛申す」ということが、我々の救いなのだということを、「猫に悠々と喰われていくことが救いである」という表現で細川先生はおっしゃったのであろう。

これを読んだとき、たとえば、ネズミを捕らえて喰う「猫」のような、抗いようのない出来事、つまり、思いどおりにならない出来事としての「苦」から逃げる、または「苦」を退散させてくれる救いの手を求める、そうではなくて、「理不尽としか言いようのない現実を、ありのままに受け入れること」、「在りのままの現実を受け入れて、念佛申す」という言葉が、スッと心に入りました。

さきに、「がんである私、という状況そのものを引き受けると決断すること」を覚悟したと申しましたが、8月初旬のバイオプシー（生体細胞検査）から9月初旬の上皮内がん切除手術を受けるまでの間、「真の決断」であったはずの覚悟が、何度も揺らぎそうになりました。しかし、この「9月のご案内」（『「浄土真宗の救い」について』）の一文で、何とか踏みとどまることができました。

9月10日に東京労災病院を退院し、自宅に戻ると、出版ニュース社から手紙が届いていました。私は同社発行の旬刊誌『出版ニュース』に2012（平成24）年から、連載コラム「ブックセラピー」を寄稿しています。手紙の封を開けると、『出版ニュース』休刊のお知らせ、が入っていました。

これまで、8月19日には『天狗岳へ』が、9月4日には『9月のご案内』が、それを私が読むべき日に、「気づき」を与えてくれました。9月10日に開封した、『出版ニュース』休刊のお知らせもまた、「ものごとには、必ず終わりがある」ということに気づかせてくれました。そして、先々月、『出版ニュース』3月中旬号では、7年3カ月つづいた連載コラムの最終回、「ブックセラピー」No.87を『がまんする〈こころ〉、正直な〈からだ〉』で締めくくることができました。

私はいま、文教大学越谷校舎と湘南校舎で、『やまとことばでとらえる〈ほとけごころ〉』講座、『エピソードで綴る〈自分史〉ハイライト』講座を担当していますが、この社会人講座も永遠につづけることはできません。いつか必ず終わるときがくる、考えてみれば、当たり前のことですね。

また、生老病死の「四苦」は、すべて思いどおりにならないこと。いつか、死によって人生劇場は千秋楽を迎える、必ず終わりがある。なぜ死ぬのかという問いに、それは生まれたから老いて病み、そして死ぬ、という、ひとつの答えがあります。つまり、生まれたときから、死に向かっていくというわけですが、私はそれを、生まれたときから、死に向かって生きていくのだ、と考えたいと思います。

### 遠藤周作を苦しめた結核菌に助けられる

さて、9月に膀胱がん切除手術を受けたあとは、10月中旬から、毎週月曜日に通院して、合計6回のBCG注入療法を受けました。家への帰り道は、1時間半ほど電車を利用するのですが、途中で4～5回下車して、駅のトイレに駆け込みます。はげしい頻尿と血尿で下着にシミがつきます。家に帰ると、ブルブル悪寒がして、夕方から急激に体温が上昇し、夜中には39～40度の高熱になります。腋の下や首の両脇にアイスパックをあて、何とか翌朝には37度台に下がるのですが、数日間は37度前後の微熱がつづきます。

BCG（ウシ型弱毒結核菌）注入療法では、BCGを膀胱内のがん細胞に付着させ、BCGががん細胞の中に取り込まれると、強い免疫反応が起こり、はげしい炎症反応を生じます。この炎症反応が高熱の原因ですが、それは副作用ではなく、これが主作用なので、高熱が出てもできるだけ解熱剤は使わずに、アイスパックで対応していました。

このころは、BCG注入療法と並行して、毎週木・金と、大学の社会人講座がありました。木曜日は越谷校舎まで片道1時間半、金曜日は湘南校舎まで片道2時間半かかるので、何度も途中下車してトイレに駆け込むことがつづき、心身ともにかなり大変つらい思いをいたしました。

しかし、それは、かつて遠藤周作さんをさんざん苦しめた結核菌、BCGが、いま、私の膀胱がんの中に入

り込み、強い炎症反応を介して、免疫治療を加勢してくれているわけですから、これは 23 年前に帰天された遠藤さんが、天国という名のお浄土から、差し伸べてくださった慈悲のまなざし、愛のはたらきであったような気がいたします。天国の遠藤さん、ありがとうございます。

その後、BCG 注入療法は 11 月末で 6 回目が終了し、現在は毎月 1 回、通院して経過観察の診療を受けています。3 月の膀胱内視鏡検査では、「とくに新しい病変は見当たらない」という診断をいただき、ひとまずホッとしたしました。しかし、膀胱がんの中でも、この上皮内がんは再発しやすいタイプのがんなので、これから的人生においても、できることならば「がんそのものを引き受ける」と覚悟して、*a person live with cancer* (がんとともに生きる人) でありたいと願っています。

### 妻のひと言で気づかされた、情けない私の姿

と、ここまででは、行きつ戻りつしながら、何とか「がんそのものを引き受ける」という覚悟、私の願いについてお話ししました。しかし、本題はこれからお話しすることの中にあります。

それは、9 月中旬、2 度目の入院手術を終えて、わが家に戻ったときに、妻に言われた言葉です。

夕食後、妻は私にこう言いました。

「あなたは、私がいま、何を考えているか、わかる？」

私はとっさに、こう答えました。

「それは、これからじゅうぶん健康に気をつけて、心配かけないようにしてほしい、ということ？」

すると、急に悲しそうな表情になって、さらに、こう言ったのです。

「私はね、来年のいまごろ、あなたと一緒に旅行することができるかな、と思っていたのよ」

私は妻が発したこの一言に、脳天にガーンと痛棒を喰らったような、大きな衝撃を受けました。

この夏の数か月の間に、「がんそのものを引き受ける」という選択をした、といつもりになっていた私は、自分ひとりの頭の中だけで、そう思い込んでいただけでした。私の「がん」を引き受けたのは、私よりもむしろ、入院中、毎日面会に訪れるたびに、やさしい言葉をかけてくれ、汚れた洗濯物を持ち帰ってくれて、私の「がん」をまるごと支えてくれた、妻の

「ちから」でした。私の頭の中は「自分ががんである」ことでいっぱいになっていて、妻の「思い」の底にある「願い」や「祈り」の声が、私には聞こえていなかった。そのことに、まったく気づくことなく、自分で、自分の生き方を、あるいは死に方を考えようと、「ひとり相撲」を取っていたのです。

先ほどまでお話ししてきた「がんそのものを引き受ける」という選択は、たしかに、いくつもの「気づき」によって導かれたものですが、妻のその「思い」にまったく気づかなかつた私は、これまでも、そしていまなお罪悪深重煩惱熾盛の凡夫、実に情けない人間がありました。

相愛大学教授の釈徹宗さんが、数年前、NHK のテレビ番組で話された言葉を思い出しました。

「真っ暗な中で、光が当たる。すると、自分の影が見える。自分の情けない本当の姿が浮かび上がる。それこそ、救いなのだ」

釈さんはこの「100 分 de 名著『歎異抄』第1回「人間の影を見つめて」という番組で、西洋のキリスト教・イスラム教などが、神への信仰によって救われていく「救済型」の宗教であるのに対して、東洋の仏教は自分自身が修行して大きく転換していく「自己変容型」の宗教であると述べておられましたが、妻のひと言という「光」に照らされて、「がんそのものを引き受け」ると言いながら、これまでと何ひとつ変わっていない自分、自己変容できていない黒い影が写し出され、その情けない自分の姿に「気づかされた」ことこそが、本当の意味での救いであった、そう思います。

この 1 月に 92 歳になった私の母は、現在介護施設にお世話になっておりますが、これまで何回も、手術や入院治療を受けています。子宮筋腫、盲腸炎、胆石、左耳の真珠腫、大腸がん、蜂窩織炎…。しかし、この私は「長男だから、母親の面倒を看たい」と宣言しておきながら、入院・手術のときは決まって「ぼくは仕事が忙しいから、お願ひします」と言って、母の手術に立ち会ったのは、長男の私ではなく、すべて私の妻でした。出張先の九州で接待の酒席から、「きょうの手術はどうだった」と酔った声で電話をかけたこともあります。私はほんとうに情けない人間です。

しかし、自分が「本当に情けない人間」だったと気

づくことは、本当に情けない自分を、高次の意識で観ている、もうひとりの自分、ハイヤーセルフ（higher-self）、高次の自己がいるということです。それは仮性、あるいは仮の智慧の眼といつてもいいかもしれません。

今回の「がん」をひとつのきっかけとして、仮の智慧の光に照り返された「本当に情けない自分」の影に気づき、自分の内なる仮性、仮のはたらきと一体になる生き方をめざしたいと思います。

### 今を精いっぱい生き切って、あとはお任せする

昨年の2月、医療専門職ではない私が、学術大会の会頭を務めた、第35回日本東方医学学会のシンポジウム「クオリティ・オブ・デス（安らかな死）をめざす東方医療」に、シンポジストとして登壇された、田畠正久先生は「グッド・デス（よき死）」について次のように述べられました。

Good Death、「よき死」です。従来、「死」は不幸の完成であると考えていたけれど、どうも私たち人間の人生という全体を眺めたときに、人間に生まれてよかったです、生きてきてよかったです、仏教で言うならばあとは「お任せ」という形で、もう何の心配もないと受けとめられて、その人なりの人生を生き切っていく世界、日本人1億2000万人が本当に「よき生」を生き切ったとなる道ではないかということを、私は仏教の学びから教えられます。（中略）

仏教が教える生き方は、今を精いっぱい完全燃焼して生き切って、あとはお任せするという形で、仏さんがいいようにしてくれる。浄土教の場合は、教えに自分の分別の思考の浅くて狭くて局所的であることに気づき、仮の世界の圧倒的に大きいことに目覚める者は「念佛する者を淨土に迎えとる」の仮の心を素直に受け取れるようになり、「仮にお任せ」を生きるわけです。だから、基本は今しかない。今日しかない。それを私たちは一日一日をいかに精いっぱい生きていくか、ということになります。

そうしますと、老・病・死はあってはならないことではなく、年をとるということは楽しいことです。今まで見えなかつた世界が見えるようになる、長生きはするものですねと、こういうふう

に受け止めに導かれます。

よく、あの世のことを「黄泉（よみ）の国」といいます。これは、暗い「闇（やみ）」が「黄泉（よみ）」に転化したもので、上古代の日本では冥界（めいかい：ほとんど光が届かない闇の世界）、常世（とこよ：常に夜である永久を意味する世界）ともいいます。また、死んだと思った人が生き返ることを「よみがえる（黄泉の国から生還した、帰ってきた）」といいます。

私たちは、毎晩、寝床の中で目をつぶり、闇の国である黄泉の国に行く、つまり、毎晩、一度死にます。そして、翌朝、目を覚ますと、新たに黄泉国から帰ってくる、昨晩とは違う、よみがえた自分に出会うのです。毎晩目を閉じ、毎朝目を覚ます、生と死のドラマが繰り返されています。

このシンポジウムでの田畠先生のお話を、5月11日の日付に替えると、次のようにになります。

たとえば、きょうであれば、2019年5月11日を初体験して、そして、きょうの夜、5月11日を初体験した私は死んでいきます。だから、「いのち」が一刹那ごとに誕生と消滅を繰り返しているということは、一瞬一瞬が生死一如（しょうじいちによ）なのです。だから、仏教には明日はありません。今日しかないと言います。

そういう意味で、Good Death（よき死）というのは、浄土教では往生浄土して「仮に成る」、つまり仏さんに成るということなのです。仮に成るということはこれ仏教で言うならば人間として完成する、人間として成熟するということを教えてくれているのです。成仏するということは死ぬことではなく、人間として成熟して仮に成るということを仏教が教えてくれているわけです。

一人称、この私のグッド・デス、原山建郎の「よき死」とは、きょうという一日を、一瞬一瞬精いっぱい生き切ること、毎晩目をつぶり、ありがとうございます。毎朝目を覚まし、ありがとうございます。ひとつなりの生と死を、ひとつ生きて、そして、ひとつ死ぬ、ということだと思います。

本日は、ご清聴いただき、まことにありがとうございます。

編集後記●早朝のウォーキングが日課です。冬は暗いので街灯がある住宅街を歩きますが、夏場は、木陰の続く農村地帯を歩きます。私の地方の農村地帯は、道のかどかどに道祖神（どうそしん）という神仏を石に刻んだ石碑が建っています。道祖神は「手向けの神」ともいい、悪霊（あくりょう）や疫病（えきびょう）の侵入を防ぎ追い払うために村境・峠・辻などの道端に祀られているものです。昔は山・川・海・坂などに神靈が宿り、旅人に危害を加えると信じられていたので、神に幣（ぬき）（神に捧げる木綿・麻などを用いた供え物）を手向けたようです。●浄土真宗では、こうした現世祈祷を嫌います。現世祈祷とは、呪文や読経など神仏の力をを利用して、願い事が叶うようにと祈ることです。いわば神仏の力をを利用して私の都合を成就させることです。●迷信や現世祈祷を生み出す人間の特性があります。一つは他罰性です。心配や不幸の原因を自己ではなく自分以外のものに求めようとするものです。二つ目は、コントロール幻想です。自分がコントロールできない事象を、あたかも自分で制御できていると思い込むことです。個人的なジンクスの類も、未来をコントロールできるという思い込みによっています。三つ目は、人は、出来事を物語化して受け入れるということです。物語化するというのは、生きる上に一つの現象があると、過去の出来事と結び付けて理解することです。たとえば癌を発病すると、過去に原因を探します。この3つの要素が迷信や現世祈祷が生み出す素地です。たとえば生贊（いけにえ）です。神への供物として生きた動物などを供えることです。幸不幸の原因を外（神）に求め、それをコントロールできるという幻想と、「こうだからこうなる」という因果律を持ち込んでなされる行為です。●拙著小説『親鸞物語』の中に次のような描写があります。「われら世俗の者は、思い通りになったことのみに喜びを思います。その思い通りになったことのみに幸せを見出すという己の闇が知らるれば、人は祈る思いから解かれるのでござる。…思い通りにしたいと、災難を避けるためにと迷信にこだわり、神仏に祈る。しかし阿弥陀仏の光明によってこの己の闇が破られるとき、迷信にこだわり神仏を祈る必要のない境界が開かれます。」●そうは言っても、「祈らずはおれない」ことがあります。毎月の「がん会」は、そのような、どうにもならないことを話す場でもあります。（西原）

ビハーラとは 「安らかな」「くつろぎ」「安住」「お寺」などの意味を持つサンスクリット（梵語=インドの古語）で、「ホスピス」に代わる仏教語です。この「ビハーラ」を、みんなで力を合わせて、つくりたいと願っています。

## 【がん患者・家族語らいの会 例会予定】

毎月第2土曜日 午後1時30分より

会場：築地本願寺

### 2019年8月の例会：8月3日 会場：講堂

\* 講師：黒田 正宣 氏（武藏野大学学院長）

講題：「お念仏に遇う」

内容：癌で苦しんだ母を偲んで

ご講師プロフィール：兵庫教区神明組萬宣寺住職

築地本願寺副宗務長

東京教区教務所長

\* 「がん患者・家族語らいの会」の関係者の方々への追悼法要が営まれます。

### 2019年9月の例会：9月14日 会場：伽羅

\* 講師：成田 智信 氏（「還る家ともに」代表役員）

\* 講題：「お寺のデイサービスの実践について」

### 2019年10月の例会：10月12日 会場：伽羅

\* 講師：村松 静子 氏（在宅看護救急センターLLP代表）

\* 講題：「『自主逝、の心』

## 【がん患者・家族語らいの会通信 No.208】

2019年8月3日発行

編集者 塩 幸生

発行者 北村 信也

発行所 東京ビハーラ がん患者・家族語らいの会

〒104-8435

東京都中央区築地3-15-1 築地本願寺内

TEL/FAX 03(5565)3418

## 【東京ビハーラ電話相談】

☎ 03-5565-3418

（毎週月～金、14:00～17:00）